Sci/PerPhy

早稲田大学
理工学研究所報告

第131輯

Waseda Daigaku, Tokyo. Rikogaku Kenkyujo
" Hokoku

BULLETIN OF SCIENCE AND ENGINEERING RESEARCH LABORATORY

WASEDA UNIVERSITY

No. 131

change of the collected charge which depends on the emission angle of α-particles. The aggregation of TEA increased with time in liquid Xe, but such a trend was not found for TMA doping.

References

1) T. Doke, Nucl. Instr. and Meth. **196** (1982) 87.
2) H. Ichinose, T. Doke, J. Kikuchi, A. Hitachi, K. Masuda and E. Shibamura, submitted in Nucl. Instr. and Meth. A.
3) S. Suzuki, T. Doke, A. Hitachi, A. Yunoki, K. Masuda and T. Takahashi, Nucl. Instr. and Meth. **A245** (1986) 78.
4) A. Hitachi, H. Ichinose, J. Kikuchi, T. Doke, K. Masuda and E. Shibamura, to be submitted in Phys. Rev..
5) K. Masuda, T. Doke, A. Hitachi, H. Ichinose, J. Kikuchi, E. Shibamura and T. Takahashi, Nucl. Instr. and Meth. **A279** (1989) 560.
6) T. Takahashi, S. Konno, T. Hamada, M. Miyajima, S. Kubota, A. Nakamoto, A. Hitachi, E. Shibamura and T. Doke, Phys. Rev. **A12** (1975) 249.
7) G. Jaffe, Ann. Phys. **42** (1912) 303.: H. A. Krammers, Physica **18** (1952) 665.

早稲田大学理工学研究所報告第131輯（1991）pp. 9～13

エジプト・マルカタ王宮出土“irp”（ワイン）の文字片について

西本　真一

Notes on the Wall Fragments Bearing the Inscriptions "irp" (wine) found from Malkata Palace

Shin-ichi NISHIMOTO

(Received 20 October 1990)

The fragments A1 and A2 had been found from the surface dump located on the existed wall between "Room F" and "Room G". It is confirmed that the painted mud fragments bear the hieroglyphic inscriptions *irp n p3 ḥb-sd*, "The wine for the sed-festival".

These inscriptions are well known to Egyptologists as the oval seal impressions commonly stamped on jar sealings, however it is clear from the observation on the painted mud pieces that the fragments representing the same inscriptions "*irp n p3 ḥb-sd*" must have belonged to the architectural wall of Malkata Palace.

In this paper these curious painted mud pieces are reported with photograph and drawing.

Key words: Ancient Egypt, Malkata Palace, Hieroglyphic Inscription, Jar Sealing

1. はじめに

前稿[1]においてはエジプト・マルカタ王宮址内の，「王の宮殿」のほぼ中心位置を占める「Room H」(Fig. 1) から出土した彩画泥片のうち，聖刻文字列の断片と思われるもののみを扱ってその復原考察をおこなった。当王宮の「王の宮殿」では「Room H」の他に，「King's Bedroom」や「Room B」などの部屋からも聖刻文字列を示す彩画片が多数出土している。しかしながら，これらの大部分はやはり，「Room H」の場合と同じような王名や修飾語を記した断片であることがすでに明らかにされており[2]，上下エジプト王名やサァ・ラー名，王名を修飾する慣用句だけが描かれているこのような聖刻文字列片に関しこのため，本稿では「Room F」と「Room G」との境にあたる壁体部分の近辺から出土した，上記の文字列片とは全く別種の聖刻文字列片に目を向けることとする。

この聖刻文字列片は壁面に描かれていたものの一部と考えられるが，ここで見られるような聖刻文字列が建築の壁面に記される列に関しては従来，まったく報告されていない。「Room F」や「Room G」がまだ発掘調査を終えていないために不明な点が多いが，偶然発見されたこの聖刻文字列片はきわめて貴重であると思われるので，ここでは若干の考察を交えながら報告をおこないたい。

2. 出土聖刻文字片の観察

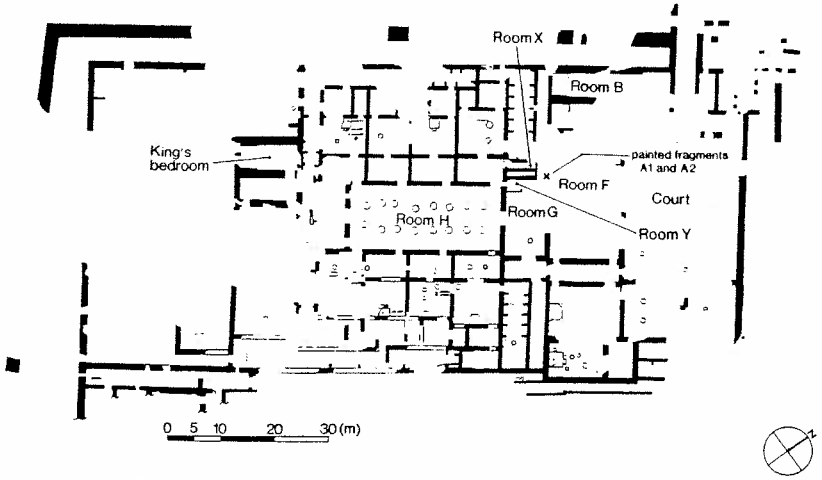

Fig. 1 Plan of "The Palace of the King" at the Malkata Palace-city, based on the survey of Waseda University carried out in 1985–86. "Room X" and "Room Y" were labelled by the author: others derive from Porter & Moss, Vol. 1, Part 2, Plan XVIII. X-sign on the plan indicates the excavated point of painted fragments A1 and A2 (see Figs. 2 and 3)

Fig. 2 Photograph of the painted mud fragments A1 and A2. The scale that appears in the photograph is 5 cm long.

「Room G」との境にあたる壁体近辺の地表から，れらのうちに組み入れることはできなかった（Fig. 3 参照。A1 の彩画片は一群として扱う）。しかしこの文字片が楕円形で囲まれた文字列の一部であることは，A1 の彩画片に見られる文字の形や塗られた色彩の様子，また損傷の程度との比較から明らかである。おそらくは同様の内容を記していた一連のこの文字列の，後半部分に属していたものと判断される。

彩画片の厚さは 3 cm ほどであり，裏面はいずれの場合においても平坦であった。天井画片の場合にはこのような裏面の形状を呈することはなく，また泥質も天井画片の場合と比較してやや堅い。「Room H」から出土した彩画片の場合では，壁画片と類別されるものは天井画片と比べて泥質が堅いという傾向が見られる。以上から，文字別を含んだこの彩画については，かつては壁画に描

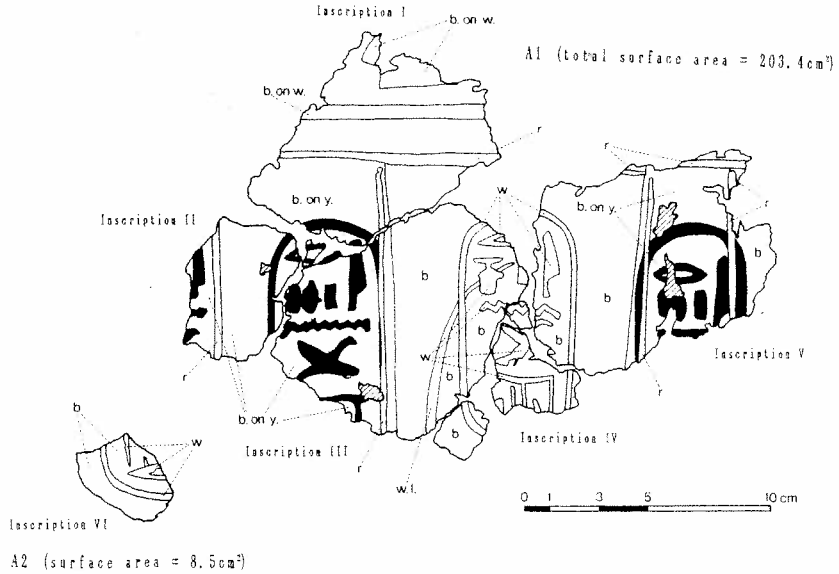

Fig. 3 Fragments A1 and A2 found from the surface dump existing between "Room F" and "Room G". Solid black represents black; plain areas are transparent yellow on white ground unless otherwise labelled. The color labels are: r = red; b = blue painted directly on mud plaster; w = white (damaged); b. on w. = blue on white ground; b. on y. = blue on yellow ground (transparent yellow on white ground); w. l. = trace of white line painted on mud plaster beneath blue ground. Hatching represents areas of destruction.

色で描かれた文字Ⅰ，及び同色で引かれている水平線などが認められた。赤線の下方には楕円形で囲まれた文字列Ⅱ～Ⅴが見られる（Fig. 3）。

文字Ⅰは断片的にうかがわれるのみであり，残された文字の輪郭からは（"ḫᶜ"）である可能性が高いと思われる。赤い水平線の上方にこの文字だけが記されていたとは考えにくく，この文字のほかにも描かれていた文字が存在していたはずであり，かつては文章をなしていたもののごく一部だけが残存していると想定される。この文字が左右対称であるために，赤い水平線より上の部分に推定される文字列が右から左に描かれたものであるとも考えられるが，右から左に記されたものであるとの判断

たと考えることができよう。

楕円形で囲まれた各文字列は，上から下へ向かって記述されており，またいずれの文字列も右向きであることが了解される。その内容は "irp n p3 ḫb-sd"，すなわち「セド祭のためのワイン」と読まれ，古代エジプトの王がおこなっていた重要な儀式であるセド祭のために用意されたワインを指していることが知られる。ただし「ワイン」（"irp"）の決定詞には 2 種類の文字が用いられており，A1 の彩画片中，文字列Ⅲと Ⅴでは が，また文字列Ⅳでは が記されていた。

赤い線については，彩画片 A 1 の上下を分け

れている点が注意を惹く。

この他，赤い垂直線による区画を境として文字列の地色が異なる部分が見られ，たとえば黒色で記された文字列Ⅱ，Ⅲ，Ⅴの地色の部分については，泥モルタル上に白地を施し，透明の黄色を薄くかけたその上をさらに青色で塗り潰しているらしく思われる。文字列Ⅳ とⅥを描きあらわしている色彩は変色しており，正確には見極め難いが，たぶん白色で文字列を記していると観察される。この部分の地色については，泥モルタル上に青色を直接塗っていると判断された。

文字列Ⅱ，Ⅲ，Ⅴの地色の部分に関する観察からは，この部分が描き直されていることも考えられるが，肉眼による観察では断定をおこなうことができず，ここではその可能性だけを指摘するにとどめたい。

3.　聖刻文字片に関する考察

以上のように，マルカタ王宮の「Room F」と「Room G」との境から出土した彩画片には，「セド祭のためのワイン」という文が楕円形に囲まれていくつも描かれていたことが判明したが，楕円形によって囲い込まれたこのような文字列は通例，Jar Sealing と呼ばれる泥の蓋に記されていることが知られている。ワインやビールなどを入れた土器の口を封じるため，陶片や植物を編んだものなどをまず土器の口の上に置き，次いで土器の口の部分全体を覆うように泥で封がされるのであるが，聖刻文字列はこの泥の封 Jar Sealing の側面に，その器の内容物を示すために押印されることが多い。この他，押印されずにただ絵の具で文字列が泥の上に描き記される場合も見受けられる。また，聖刻文字列の押印を施した上に彩色をおこなう場合もあることが報告されている[3]。

今回発見された聖刻文字片は，泥の上に彩色されているという点ではこの Jar Sealing の文字列と共通点をもち，また記された文字列の内容に関して Jar Sealing の場合でよく見られるものと

字列を報告しており，Hope[5] も文字列Ⅳと同一で，しかも彩色されている Jar Sealing 上の文字列の例を挙げている（マルカタ王宮より出土）。Leahy[6] の報告書においても，Fig. 3 の彩画片で見られた「ワイン」に関する 2 種類の聖刻文字列と同じものがそれぞれ図示されており（同じくマルカタ王宮より出土），Jar Sealing に記される場合では，「セド祭のためのワイン」という記述は頻繁に用いられていることが了解される。

しかしながら，本稿で示した彩画片はかつては建築の壁画に描かれていたものであるということが裏面の様相や泥質から確認され，また Jar Sealing の場合では泥モルタルそのものが土器の形に沿って円筒形をなすために，平滑な面に描かれた壁画片との区別は容易であると考えられる。一方，石造神殿や墳墓などの広間の壁画における，人物像や神殿の動作を説明した文中で「ワイン」という言葉が記されているのを見ることができるが，この場合には「ワイン」の文字列を囲む楕円形は見ることができない。供物のリストが壁面に描かれることもあるが，この場合でも「ワイン」の文字列は通例，楕円形で囲まれることはない。

以上の文字列の例との比較から，Jar Sealing に通常記されるはずの内容を持つ聖刻文字列がマルカタ王宮の建築壁体に描かれていたことを示すという点で，「Room F」と「Room G」との境から出土したこの彩画片は，きわめて稀有な例であるということができよう。古代エジプトにおける建築装飾画のモチーフと，実際の部屋の機能との関連などを念頭に置き，出土したこの聖刻文字列片についての所見を述べるとするならば，

1.　出土した位置から考える限り，本稿で示される彩画片は「Room F」か，あるいは「Room G」の壁画にあったものと判断される：

2.　一方，文字の内容から推定するならば，この聖刻文字列は本来は，実際にセド祭のためのワインの容器類を格納していたような，倉庫として用いられていたような小部屋の壁面にあったものと推定することができる。

れている[7]。今回，報告をおこなった聖刻文字列に似たものについては，アマルナの王宮の報告書では触れていないが，古代エジプト建築における壁画とその部屋の使われ方との間には密接な関わりがあることは知られているので，この聖刻文字列に関しても，実際にセド祭のために用意されたワインの容器を納めていた倉庫の壁画にあったと仮想することができるように思われる。この場合には「Room F」あるいは「Room G」の壁画に，この聖刻文字列が記されていたと仮想することは難しい。広間としての大きさを充分に有する点，また平面の形状や隣接する部屋部屋との結びつきなどから，「Room F」や「Room G」が倉庫としての性格を有していたとは考えにくいからである：

3.　この彩画片は倉庫の壁画にあったものだと考え，彩画片の実際の出土位置に近い場所にあって，しかも倉庫としての役割を担っていたであろう小部屋を「Room F」や「Room G」以外に探し求めた場合には，Fig. 1 に示される「Room X」，もしくは隣接する「Room Y」がこれに該当すると思われる。「Room X」は，もとは屋上に上がるための階段があったと考えられる場所であり，この階段の下を倉庫として用いていたと想像することは可能である。また「Room Y」は，「Room G」の壁画の装飾画が描かれた後に小壁が付け加えられたことが判明している場所であって，「Room G」の壁画の凹んだ部分を隠すかのように壁が立てられ，小さな区画が仕切られている。果たして広間の一角を倉庫として用いるかどうかについては大きな疑問が残るが，現在までの段階でここが何に使用されたのかが全く不明である以上，この小部屋をも一応考察の対象に含めておくのが適切であると思われる：

以上の点が推定される。

4.　小　　結

示しており，この点を踏まえて他の建築遺構との比較から類推をおこなえば，ここで見てきた聖刻文字列は当王宮の広間である「Room F」や「Room G」の壁面にではなく，おそらく実際にワインの貯蔵場所であった小部屋（倉庫）の壁画に描かれていたものであったと推定される。しかしながら，実際の出土場所に近接する広間「Room F」，あるいは「Room G」の壁面にあったものであるという可能性をまったく否定することはできず，最終的な判断に関しては，将来おこなわれるであろう「Room F」や「Room G」，およびその近隣の部屋の発掘調査の結果を待つ必要があろう。

Jar Sealing 上に同様の文字列が記されることは広く知られているものの，この聖刻文字列が建築の壁面にも描かれていたことを明らかに示している点で，この彩画片はきわめて貴重であるということができる。

なお本研究は，文部省科学研究費海外学術研究（昭和60～62年度交付，研究代表者：早稲田大学理工学部教授　渡辺保忠，課題：「エジプト・マルカタ南・魚の丘建築の復原調査研究，マルカタ王宮との建築学的・美術考古学的比較研究」）の交付を受けた調査の成果に基づき，おこなわれた点を付記する。

また，リヴァプール大学特別研究員・近藤二郎氏からは聖刻文字に関していくつかの御教示をいただいた。記して謝意を表したい。

参考文献

1)　拙稿：早大理工研報告，**129**（1990）．58～79.
2)　渡辺保忠，吉村作治，西本真一：1987年度日本建築学会大会学術講演梗概集（以下，「大会」と略），1037～8；渡辺保忠，西本真一，佐藤淳哉：1988年度大会，841～2；渡辺保忠，西本真一：1988年度大会，843～4.
3)　C. Hope: "Jar Sealings and Amphorae of the 18th Dynasty: A technological study", Egyptology Today No. 2, Vol. V, Warminster (1977), p. 17.
4)　W. C. Hayes: Journal of Near Eastern Studies Vol.